

幼児期の介入システムの確立とその効果

分担研究者 前川 喜平 1) 研究協力者 犬飼和久 2) 神谷育司 3) 共同研究者 斉藤さつき 4) 河合恵美子 4)

1) 東京滋恵会医科大学 2) 聖隷浜松病院小児科 3) 名城大学教職課程部 4) 聖隷浜松病院臨床心理学

1) Jikei University, Dept. of Pediatrics, 2) Seirei Hamamatsu Hospital,

3) Meijo University, Dept. of Teacher Education 3) Seirei Hamamatsu Hospital, clinical Psychology Section

【要約】 極低出生体重児として出生したハイリスク児に対する発達援助システムとして早期介入がある。この課題については、「ハイリスク児の総合的ケアシステムに関する研究」と題して平成6年度厚生省心身障害研究報告書にその研究の成果を報告している。研究結果は有効性を検討するため統制群との関わりで比較検討しているが、対象児に対する感覚統合訓練的な遊びは児の発達に好結果を与え、さらには、母親の参加が親同志のこころの交流の場となる等、その成果には期待するものがあつた。今回はこの研究を踏まえ、より厳密な研究計画のもとで研究に着手した。特に意を注いだ事項は比較対象とする非介入群との社会的環境要因についての問題であり、また、対象年齢を一歳前後にし、より早期の効果性を課題にしたことである。

【見出し語】 極低出生体重児 乳幼児期
《研究目的》

極低出生体重児として出生した児とその母親を対象に早期の発達の援助支援体制の課題に取り組むことを意図した。母子ともに来所する児に対しては指導者による対象児の自発的意欲を重んじた感覚運動的な遊びをグループ的に指導する場を意図的に設定し発達援助の体制を構築した。さらに、この場を母親達の育児に関する意志交流の場として活用し、これら早期の発達援助が児の発達に及ぼす影響を与えるか対象群と比較検討することでその効果性を検討することが目的である。

《対象と方法》

対象は1996年4月以降より同年の年末までの間に出生し、聖隷浜松病院新生児未熟児センターで養護した、1500g未満の極低出生体重児並びに超低出生体重児である。早期介入群と対照群としての非介入群の選定は対象となる児の家庭に「遊びによる運動能力発達グループへのお誘い」なる参加への呼び掛けと、家庭の社会的経済的環境状況に関する質問項目からなる依頼文を発送し応諾の有無を調査した。その結果各グループ7名ずつの介入群と非介入群が構成された。

早期介入としての対象児に対する働きかけは聖隷浜松病院内の体育館で月のうち月曜日に3回、遊びに重点をおいた感覚運動的な動作・行動が幼児の主体性を重視しつつ構成された。運動発達を念頭に運動技能の拡張を考え全体的・統合的な発達の基礎となる運動・活動的遊びである。

グループ遊びには母子ともに参加するが、子ども達の自由な遊び時間は母親達には親として日頃子育てについて考えている悩みごとを話題にする話し合いの場となる。同じ境遇にある子を持つ親として気軽になんでも話し合いのでき、かつ、子とともに遊べるべし楽しい”いこいの場”でもある。

《結果と考察》

介入群と非介入群の特性は下記の表に示される。

介入群			非介入群		
N=9	M=7	F=2	N=9	M=7	F=2
Age	13.4m (SD=2.5)		Age	13.5m (SD=1.8)	
B;W	1260.4(SD=182.2)		B;W	1081.8(SD=195.8)	
G;A	207.1d(SD=12.5)		G;A	195.5d(SD=7.6)	
D;Q	92.7 (SD=7.6)		D;Q	91.2 (SD=11.6)	

両群を比較検討した場合、男女比・年齢では有意差は認められない。しかし、介入群の超低出生体重児が2例であるのに対

早期介入 感覚運動的遊び 統制群法

し非介入群では4例である。新版K式発達検査の結果であるDQ値(発達指数)には両者には差が認められない。

両群を選定する際の参加の意欲についてはいずれも積極的な意向を示していたが、遠距離であるためとか、家庭の事情で、との理由で参加できない者が非介入群の7例である。遊びグループへの参加への親の意欲や理解の度合いには両群にさして違いがないものとする。両群とも他の機関の体操教室とか聖隷浜松病院が実施しているような感覚運動的遊びグループに参加している対象児はひとりもいなかった。

今回の研究過程で、介入群への効果性を検討するためにより綿密な研究計画を立案した点は家庭の環境的要因である。親の生活環境や養育態度は子の成長・発達に強い影響を与えるものであり、刺激介入の是非を論ずるうえで無視できない要因である。養育環境としての家庭の環境要因については親の年齢・兄弟関係・家族構成・親の職業・昼間の主たる養育者・家の年間の収入・両親の学歴・住宅環境など10項目について調査検討した。社会的・経済的環境要因に基づく家庭での養育環境が子の成長・発達に関与していることは論を待たないが、早期介入という刺激の効果性を検討していくうえで、両群の家庭的環境的要因を早期介入の結果との整合性にいかに結びつけるかは検討課題である。

家庭の社会経済的環境的要因は子の養育全般に関わり無視できないが、むしろ親の子に対する養育観なり態度が子の成長・発達に与える影響は極めて大きく考慮すべき課題である。そのため特に両群の母親を対象に妊娠中に感じたことや、出産後の育児の状況など15項目にわたる質問紙調査を実施した。心身の発達に関する心理行動学的研究で剰余変数を完全に統制することは非常に困難な課題であるが、この調査結果をもとに効果性について検討することを試みた。

早期介入の効果を検討するうえで、早期介入としての母子による通所や感覚運動遊びが子どもの日常生活にどのような行動上の変化が観察されたかを調査することを意図した。16項目からなる行動特性について5段階評定で親に評価することを求めた。早期介入の効果性の検討に際しては、統制群的な手法による群として比較検討するとしても、剰余変数の複雑さを勘案し個々の子どもについて、その子どもの家庭の背景を考慮したうえで、早期介入が及ぼす効果性を発揮できたのかといった観点からの検討の必要性を認めている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】 極低出生体重児として出生したハイリスク児に対する発達援助システムとして早期介入がある。この課題については、「ハイリスク児の総合的ケアシステムに関する研究」と題して平成6年度厚生省心身障害研究報告書にその研究の成果を報告している。研究結果は有効性を検討するため統制群との関わりで比較検討しているが、対象児に対する感覚統合訓練的な遊びは児の発達に好結果を与え、さらには、母親の参加が親同志のこころの交流の場となる等、その成果には期待するものがあつた。今回はこの研究を踏まえ、より厳密な研究計画のもとで研究に着手した。特に意を注いだ事項は比較対象とする非介入群との社会的環境要因についての問題であり、また、対象年齢を一歳前後にし、より早期の効果を課題にしたことである。